



今月の農家さん

挑戦に応えてくれる農業

野洲市上屋
中島 嘉男さん (82才)



中学生の頃からご両親のお手伝いという形で農業に携わっている中島さん。26才の頃から菊の栽培をはじめて50年以上になるそうです。

現在はパートの方と中島さんの2人が、“かぐや姫”や“そよ風”など70～80品種、約18,000本を1本ずつ手作業で毎日世話をしています。

しかし、それだけ世話をしても、菊は温度や環境の変化に敏感なので、この春は長引く寒さで、開花がお彼岸の売り出しに間に合わなかったと中島さんは悔しさをにじませます。

毎回肥料を変えてみたり、殺虫剤の代わりに

害虫の忌避効果がある『ニーム』とよばれる木の粉をまいてみたり、中島さんが様々な挑戦をすると、菊も色々な形で応えてくれる事が苦労以上の楽しみだそうです。「そんな挑戦をした菊が高く売れたときは、自分の努力が認めてもらえたようで、とてもうれしいです」と中島さんは語ります。

最後に中島さんは「“挑戦や物作りを楽しむ心”、そして“ある程度の収入の見通し”この2つが農業には不可欠です。どちらも大切にしてください」とこれから農業にチャレンジされる方にエールを送ります。

営農情報

■品質向上対策として、 中干しを徹底しましょう

中干しとは水を落として、田んぼを乾かす事です。中干しには稲の根張りを強くして倒伏しにくくし、登熟期の高温に強くさせる効果があります。また、過剰分けつを防止し、適正な籾数を確保することで、乳白米の減少、厚み(整粒歩合)向上につなげて品質の良い米ができます。

水管理作業上の効果としては、間断灌漑や入水が行いやすくなり、落水時期を遅くできるので、胴割れ米を防ぐことができます。また、地面が固くなるためコンバイン作業が円滑になるのに加え、ほ場が乾きやすくなるため、水稲収穫後に麦をまく場合は適期に作業がしやすくなります。

田んぼに水を張っていると土壌中の酸素が少なくなり、温室効果ガスであるメタンが発生しやすくなります。中干しにより酸素を送る事でガス発生を抑制でき、温暖化低減への効果も見込めます。

中干しは目標茎数の8割(1株17～18本、60株/坪)(1株20～21本、50株/坪)が確保できたら開始し、7～10日間ほ場に浅い亀裂が生じる程度まで行います。深い亀裂だと、根を傷つけてしまう恐れがありますので、注意してください。

さい。好天が続くようであれば、適宜指し水をしましょう。

また、中干しを行う際には、ほ場の中と外周に溝切りをしてください。これにより田んぼに水を入れたい時、落としたい時にスムーズに水を移動できます。

水の管理や溝を掘るのは大変ですが、天候が読めない昨今において、高品質なお米へと至る確かな技術なので、ぜひ実践していきましょう。

■いもち病について

いもち病はカビによって起こる、根以外の全ての部分を侵す恐ろしい病気です。梅雨の時期に発生が多くなります。置苗を放置していたり、窒素肥料が多量に葉色が濃いほ場や、草が茂った畦畔沿いや山かげ等、風通しが悪く露が乾きにくい場所は、特に発病しやすくなります。また、例年いもち病が発生しているほ場は特に注意し、発病が見られたら直ちに薬剤(下記参照)による防除を行います。

薬剤名	使用時期	散布量
コラトップ粒剤5(3kg)	葉いもち初発10日前～初発時 穂いもち出穂30日前～5日前まで	3～4kg/10a
ブラシン粉剤DL(3kg) (地上防除用DL粉剤)	収穫7日前まで	3～4kg/10a